

今後より重要な子育て支援課題となるだろう。

VI おわりに

本稿は、出生児縦断調査第1～10回をもとに、母親の育児をめぐる負担感・不安感・不足感の変化の特徴を、パネルデータを生かした分析から明らかにすることを目的として検討を行ってきた。

今回は都道府県別ダミーを入れた分析も行ったが、都道府県変数自体が多義的であり、都道府県ダミーを入れた場合と入れなかった場合と結果が大きく異ならなかったことから、今回は分析結果を示さなかった。今後は、都道府県変数自体をもう少し具体化し、地域別の待機児童数などの個別変数を入れた分析や、地域別にサンプルを分けた比較分析など、パネルデータを生かした地域別の詳細な分析が課題となる。

先行研究では、「育児不安」の研究から蓄積されてきたが、出生児縦断調査の多岐にわたる23項目は、育児をめぐる負担感・不安感・不足感といった意識を尋ねているといえる。すなわち、前述の図表2に示したように、(1)子どもの育ち（健康・しつけ）への「不安感」を尋ねる項目、(2)身体的・精神的・経済的な「負担感」を尋ねる項目、(3)時間的・制度的に足りないという「不足感」を尋ねる項目である。

こうした育児をめぐる否定的な意識——「不安感」「負担感」「不足感」はそれぞれ次元の異なるものであり、21世紀縦断調査を用いて育児をめぐる否定的な意識を議論する際に、それらを「育児不安・負担感」と一括りにして実証分析すると、かえって実態が見えにくくなる。今後、出生児縦断調査を活用して育児をめぐる否定的な意識を議論する際には、「不安」(childcare anxiety)、「負担」(childcare burden)、「不足」(childcare deficit)の三次元を個別に分けて分析し、その関連を丁寧に議論していくことが重要だと考える。

謝辞 本論文の作成にあたり、数年にわたり研究支援者として、慶應義塾大学大学院・中村亮介氏には多くの支援を頂いた。ここに記して感謝したい。

子ども観と教育方針 2 :

「第 10 回出生児縦断調査」の分析より

元森絵里子¹

目的 本稿では、保育者の子ども観が、教育行動にどのような差異をもたらしているのかを明らかにし、子ども観研究の知見を実データで検証することを目的としている。

方法 21 世紀出生児縦断調査の、第 3 回と第 10 回の「どのような子どもに育ててほしいか」という設問を利用し、保育者の子ども観が、教育の方針や子どもの生活にどのような差異をもたらしているのかをクロス表分析および回帰分析を用いて明らかにする。以前に第 3 回の結果による分類を用いて、就学前の第 1～6 回についてと、小学校 1 年生時にあたる第 7 回の分析は行っている。今回は、第 10 回の結果を用いて高学年の入り口である 4 年生時にあたる第 10 回の分析を中心に行う。また、同時に、第 10 回と第 3 回と間の子ども観の変化の要因を検討する。

結果 保育者の子ども観をコレスポンデンス分析によって分類すると、「知性×調整」「知性×積極」「感性×積極」「感性×調整」となり、子ども観に関する先行研究が明らかにしてきたように、伝統的で厳格な子育て（厳格主義）、学歴主義、児童中心主義的なハイパーキッズ志向、童心主義に対応可能であり、第 10 回でもそれは同様であった。それぞれの子ども観を選択する保育者の属性も、実際の教育行動も、先行研究から想定される傾向と大きく逸脱しない。

第 3 回から第 10 回にかけての子ども観の変化は、子どもの成長に伴う変化として、「知性×積極」志向へ移行する全体的傾向が見られるほか、仮説的な分析ではあるが、概ね親の属性を強調するような子ども観に移行する傾向が見られる。

なお、「知性×積極」グループの子どもの生活は、学習塾に通い、友人との交流がやや少ないなど、心配な傾向も見られるが、小 1 までの同グループの傾向よりも和らいでいる。

結論 概ね子ども観研究を追認するような傾向が確認された。子どもの成長とともに、親の要求が業績主義へと移行していく傾向が見られるが、この層の子どもの生活については、脱ゆとり教育、知識社会志向の教育政策といった動向なども絡めて注視していく必要がある。また、保育者の意識で教育投資にかなり差があることも判明したため、保育者の意識で子どもの待遇に差が出ないような支援が必要である。

1 本稿の目的

筆者は、「21 世紀出生児縦断調査」（以下、出生児調査）の「平成 13 年 1 月／7 月生まれのお子さんほどどのような子に育てて欲しいと思いますか」という設問の回答傾

¹ 明治学院大学社会学部 准教授

向を用いて、全ケースを4つの子ども観を持つグループに分け、それぞれの属性や育児方針や教育行動の違いを分析してきた(元森 2008、2009、2010、2011)。

第10回調査で7年ぶりに同一の設問がなされたこともあり(問22)、本稿では、この第10回調査を主に用いて、子ども観と小学校高学年の入り口にあたる小学4年次の教育方針との関係を分析する。まず、Ⅱで、未就学時点の第7回までを分析した過去の分析内容を簡単に要約し、Ⅲで、第3回の子ども観の分類を第10回の子ども観の分析に用いることおよび、第10回子ども観の概況や2時点間の変化について説明する。その上で、Ⅳでは、第10回の子ども観を用いて、小4時点の教育方針が子ども観に規定されているか否かを検討し、Ⅴで、それらをまとめて既存の子ども観研究との整合性を確認する。なお、末尾に補論として、第3回から第10回で子ども観が変化した層の規定要因分析を試みた。これは、確定的な結論に至らなかったため、本論とは別に、仮説として提示する。

Ⅱ 21世紀出生児縦断調査の子ども観分析の試み

本節ではまず、「21世紀出生児縦断調査」の子ども観分析に関する筆者の過去の報告(元森 2008、2009、2010、2011)の概要を今一度紹介する。

(1) 子ども観研究の観点から21世紀出生児縦断調査を見る

家族や子どもに関する研究ですでに指摘されているように、「子ども」に対するまなごしは、家族の育児・教育行動に関係する。「教育家族」の誕生という形で議論されるように、歴史研究は、大正期から昭和期にかけて、新中間層を中心に、少なく産んで、愛情を注ぎ、教育投資をするような家族層が現れてきたことを明らかにしている(沢山 1990; 広田 1999; 小山 2002)。このような家族は、広田(1999)によれば、子どもの純真さや無垢を賛美する「童心主義」、早くから厳しくしつけや道徳教育を行って規律を身につけさせようとする「厳格主義」、知識を習得させ学歴をつけさせようとする「学歴主義」の3種類の「〈教育的配慮〉」に関する心性を併せ持っていたという。そして、このような「教育する家族」は、学校教育を媒介に、「子ども」を国家秩序の中に組み入れていく役割を果たしていたということも、しばしば指摘される(小山 2002)。

しかし、他方で、現代において、子どもが「授かる」ものから「自分のため」に「つくる」ものになるにつれて、子ども観が変容しているという指摘もあるが(沢山 1987; 柏木 2001)、そのことにより子どもをもつ理由や社会に位置づける論理が揺らいでいるという指摘もある(本田 2007)。そこで、長期追跡が可能な縦断調査を用いて、子ども観研究との整合性を確認しつつ、家族の子ども観がその後の育児・教育行動にどのような影響を与え、子ども自身の生活や長じての人生選択にどう影響してくるかを検証することは、21世紀の子ども観を見るうえで意味があると考えられる。

「21世紀出生児縦断調査」(以下、出生児調査)には、第3回問14および第10回問22に、「平成13年1月/7月生まれのお子さんほどのような子に育てて欲しいと思

いますか。次のうち、特に重視したいもの5つまでを選んでその番号に○をつけてください」という設問がある（選択肢および回答傾向については図1参照）。この設問の15項目の選択肢には、人々の人生観を社会性や公共心にも引き付けた形で尋ねた「日本人の国民性調査」や「青少年の連帯感調査」「青少年の生活と意識に関する基本調査」に比べて、感性や協調性に関わる項目が多く（元森 2008）、はっきりとした形で学歴取得への志向性や共同体や社会への志向性を見ることはできない。しかし、この回答結果を用いたコレスポネンス分析によって、回答者を4つのグループに分けることで、先行研究と比較的整合性のとれた子ども観の分類が析出できた。よって、これを用いることで、子ども観と育児・教育行動の関係性が継続的に把握できると考えた。

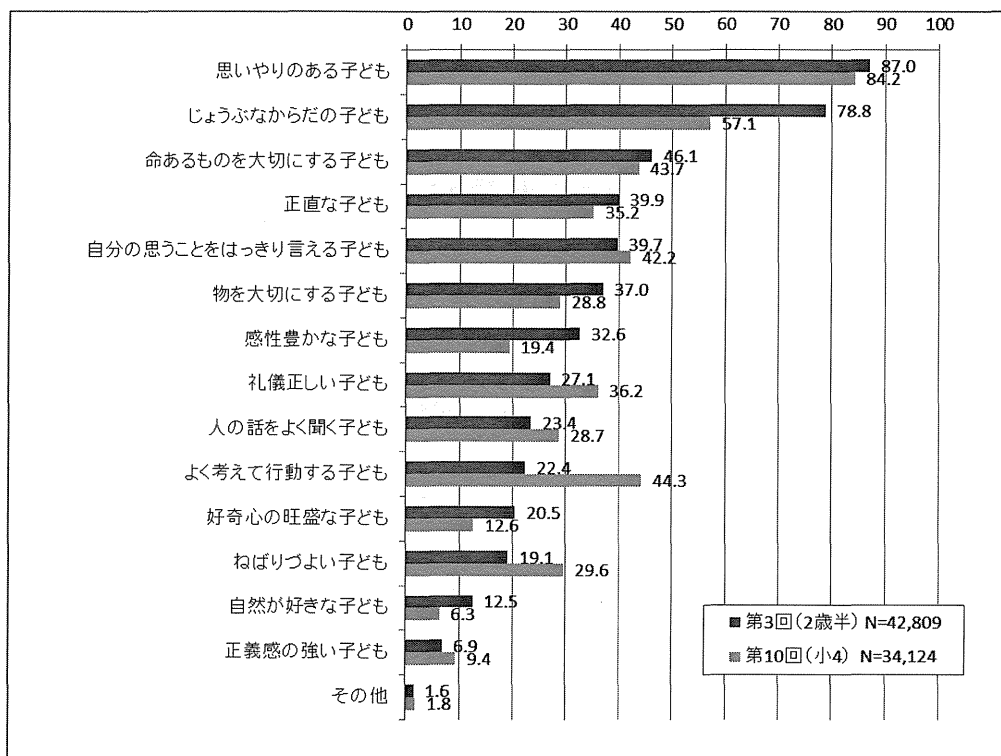


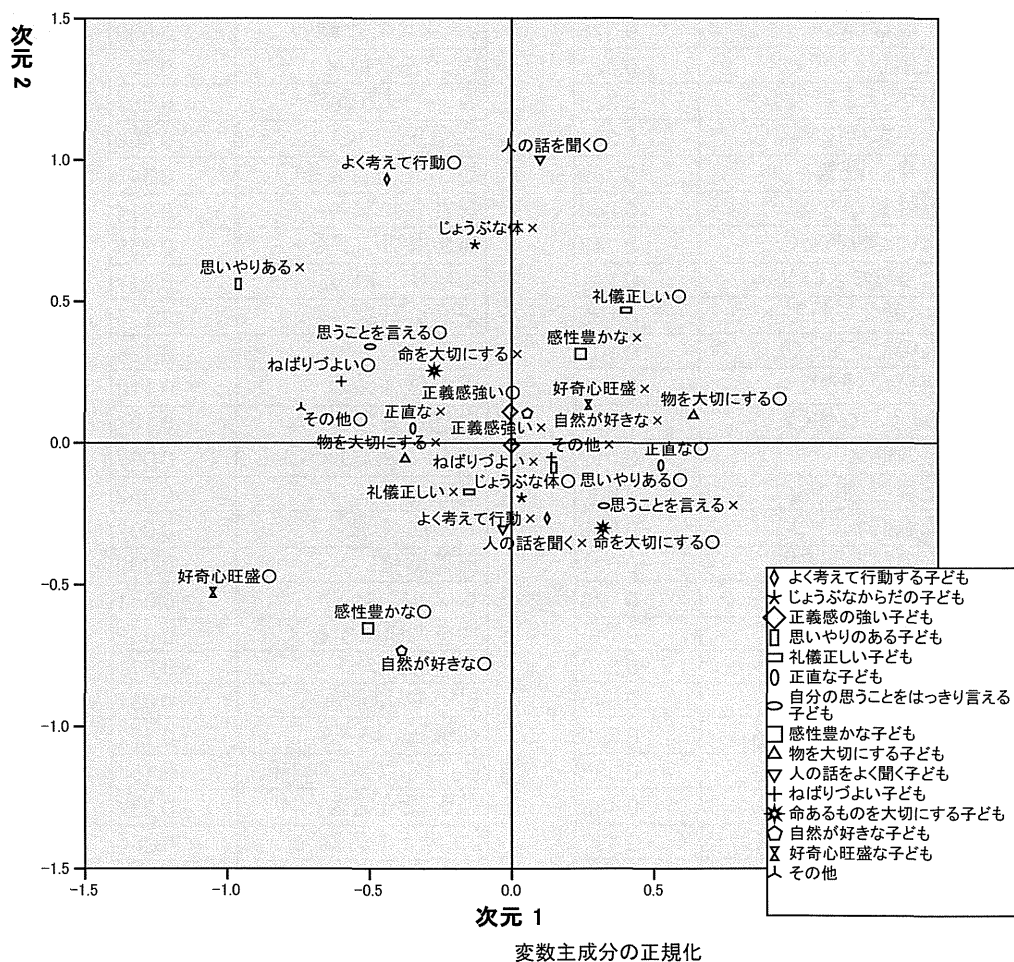
図1 第3回・第10回「どのような子どもに育ててほしいか」の単純集計（多重回答）

(2) 子ども観の4分類

グループ分けは、SPSSを用いたコレスポネンス分析で析出された2軸を元に行った（図2、表1、表2）²。第1軸は、「物を大切にする子ども（該当）」、「正直な子ども（該当）」、「礼儀正しい子ども（該当）」、「命を大切にする子ども（該当）」、「自分の思うことをはっきり言える子ども（非該当）」、「好奇心が旺盛な子ども（非該当）」など、積極性よりも他者や環境に従順で協調性を期待する傾向と、「好奇心が旺盛な子ども（該当）」、「ねばりつよい子ども（該当）」、「感性豊かな子ども（該当）」、「自分の

² 本分析において、各選択肢を選択した場合（該当）と選択していない場合（非該当）を同等のものとして扱い、多重コレスポネンス分析を行った。選択上限が5つまでとされているため、該当と非該当を同等のものと扱えるかには留保が必要であるが、現実的な制約からこの方法を用いた。より詳細な手法に関する議論は、元森（2008）を参照されたい。

思うことをはっきり言える子ども(該当)、「よく考えて行動する子ども(該当)」、「思いやりのある子ども(非該当)」など、協調性よりも自発的で積極的な行動を支持する傾向とを両極とするため、積極的・自発的か調整的・協調的かという子ども観の差異を表す「調整—積極」軸とした。第2軸は、「人の話をよく聞く子ども(該当)」、「よく考えて行動する子ども(該当)」、「礼儀正しい子ども(該当)」、「自分の思うことをはっきり言える子ども(該当)」、「じょうぶなからだの子ども(非該当)」、「思いやりある子ども(非該当)」、「感性豊かな子ども(非該当)」など、感性や共感よりも判断力や思考力など知的な活動を期待する傾向と、「自然が好きな子ども(該当)」、「感性豊かな子ども(該当)」、「好奇心が旺盛な子ども(該当)」、「命を大切にする子ども(該当)」、「人の話を聞く(非該当)」と、知的活動よりも感性や体感を重視する傾向とを両極とするため、知的・頭脳的活動重視か感性的・体感的活動重視かということも感の差異を表す「知性—感性」軸とした。



※図中の表記は略したもの。各項目○=該当/×=非該当を示す。

図2 第3回問14の多重コレスポネンス分析(カテゴリーの布置図)

表1 第3回問14の多重コレスポネンス分析（固有値とイナーシャ）

モデルの要約

次元	Cronbach のアルファ	説明された分散		
		合計(固有値)	イナーシャ	分散の%
1	.334	1.454	.097	9.691
2	.275	1.345	.090	8.966
総計		2.799	.187	
平均値	.306 ^a	1.399	.093	9.328

a. Cronbach のアルファ平均値は、固有値平均値に基づいていま
す。

表2 第3回問14の多重コレスポネンス分析（数量化得点）

一次元		二次元	
物を大切にする○	0.640	人の話を聞く○	1.002
正直な○	0.526	よく考えて行動○	0.932
礼儀正しい○	0.402	じょうぶな体×	0.701
思うことを言える×	0.325	思いやりある×	0.561
命を大切にする○	0.321	礼儀正しい○	0.468
好奇心旺盛×	0.269	思うことを言える○	0.341
感性豊かな×	0.243	感性豊かな×	0.314
思いやりある○	0.149	命を大切にする×	0.255
ねばりづよい×	0.141	ねばりづよい○	0.217
よく考えて行動×	0.125	好奇心旺盛×	0.135
人の話を聞く○	0.101	その他○	0.124
自然が好きな×	0.055	正義感強い○	0.110
じょうぶな体○	0.035	自然が好きな×	0.104
その他×	0.012	物を大切にする○	0.097
正義感強い×	0.000	正直な×	0.052
正義感強い○	-0.006	その他×	-0.002
人の話を聞く×	-0.031	正義感強い×	-0.008
じょうぶな体×	-0.128	ねばりづよい×	-0.051
礼儀正しい×	-0.148	物を大切にする×	-0.056
命を大切にする×	-0.272	正直な○	-0.079
正直な×	-0.345	思いやりある○	-0.087
物を大切にする×	-0.373	礼儀正しい×	-0.172
自然が好きな○	-0.387	じょうぶな体○	-0.194
よく考えて行動○	-0.438	思うことを言える×	-0.222
思うことを言える○	-0.497	よく考えて行動×	-0.266
感性豊かな○	-0.505	命を大切にする○	-0.301
ねばりづよい○	-0.599	人の話を聞く×	-0.304
その他○	-0.741	好奇心旺盛○	-0.528
思いやりある×	-0.961	感性豊かな○	-0.654
好奇心旺盛○	-1.050	自然が好きな○	-0.733

※表中の表記は略したもの。各項目○=該当/×=非該当を示す。

この2軸によってできる4グループは、子ども観研究が明らかにした「近代的孩子観」に引きつけて解釈可能である。

大正期の新中間層から出現し、現代においても広く共有されている「教育家族」の子ども観について、広田(1999)が、子どもの純真さや無垢を賛美する「童心主義」、早くから厳しくしつけや道德教育を行って規律を身につけさせようとする「厳格主義」、知識を習得させ学歴をつけさせようとする「学歴主義」の3つの「〈教育的配慮〉」に関する心性を併せ持っているとして述べている。「知性×調整」型の第1象限は、道德・しつけに関する知を重視する厳格主義、「知性×積極」型の第2象限は、子ども自身による知性の獲得・発揮を強調する学歴主義(より一般的な言い方をすれば業績主義)、共に「感性」型の第3、4象限は、「童心主義」に近いものと読み解きうるのである。

さらに、広田の分類の「童心主義」を、子どもの純真さや無垢さ、大人にはない子どもらしい感性などを尊重する、いわゆる「童心主義」と、欧米の「児童中心主義」の教育運動の影響を受けた、子どもの自発性や積極性を強調する思潮とに分けて考えれば、「感性×積極」の第3象限は、何事においても子どもの自発性と感性を重視する児童中心主義、「調整・強調」型の第4象限は、周囲に調和した子どもらしさを重視する童心主義と言い換えうる。すなわち、コレスポネンス分析によって析出された4分類は、図3のような先行研究と整合的な4種類の子ども観と解釈可能なのである(元森2007)。

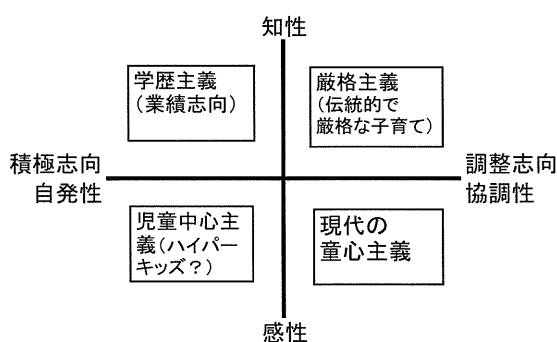


図3 「出生児縦断調査」における子ども観の4分類

(3) 4つの子ども観の規定要因

以上の4種類の子ども観それぞれの回答者の属性傾向を検討したところ、表3のようになった(元森2008)。すなわち、「知性×調整」は、地方の保守的ないし階層的に劣位と見られる層を担い手とする。同様に、「知性×積極」は、エリートで父母の年齢が高めの層、「感性×積極」は、都市部で母親が常勤職など時代の先端をいく層、「感性×調整」は、専業主婦家庭で若く小さい子どもの多い層に多く見られる。これは、「厳格主義」「学歴主義」「児童中心主義」「童心主義」の子ども観の担い手として、先行研究が指摘してきたものと矛盾しない。

表3 子ども観4分類の規定要因

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
子どもの性別	女兒	男児		女兒
子どもの成長*		特に成長が早い	成長が早い	
兄弟	兄弟あり		兄弟なし	
弟妹				弟妹あり
多胎児か否か				三つ子
祖父母との同居	祖父母と同居		祖父母と別居	
	(別居の場合、祖父母との行き来が頻繁であるほど調整志向)			
都市規模*	郡部		13大都市	
住居携帯	一戸建て		集合住宅	
母親の職業			母常勤	母主婦
父親の職種	父(母)職業威信低い	父(母)職業威信高い		
父母の収入		父母の収入高い		
父母の学歴	父母高卒以下	父母高等教育以上		父母高卒以下
父親の年齢		父40代以上		父30代
母親の年齢		母30代後半以上		母30代前半以下
回答者	母が回答	父が回答		母が回答

※*印は、ロジスティック回帰分析では有意ではなかった

また、子ども自身の性格要因との関連を見るために、4つの子ども観ごとに、第4回問11「平成13年1/7月生まれのお子さんは現在どのような性格だと思いますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください」の各選択肢（「その他」「わからない」を含む23項目）を独立変数としたロジスティック回帰分析を行ったところ、有意であった項目が表4となった（元森 2009）。設問時期が前後するため因果関係も明確でなく、印象論の域を出ないが、「知性—感性」の軸は子どもの性格を概ね反映し、「調整—積極」の軸は子どもの性格を反映している部分と逆を期待している部分があると言えないだろうか。

表4 子ども観4分類と子どもの性格

知性×調整
+ 勝気・負けず嫌い 1人でやりたがる 落ち着きがない
- 何事にも慎重 何事にもマイペース 素直 執着心が強い 好奇心が旺盛
知性×積極
+ おとなしい 勝気・負けず嫌い 執着心が強い わからない
- 活発 飽きっぽい
感性×積極
+ お調子者 何事にも慎重 何事にもマイペース 素直 執着心が強い 好奇心が旺盛
- 1人でやりたがる 落ち着きがない
感性×調整
+ 活発 飽きっぽい 甘えん坊 わからない
- おとなしい 何事もマイペース 我が強い

これらから、子ども観の4分類は、家族の属性を主として、子どもの性格や成長状況、きょうだい順位なども考慮した回答の結果として形成されていると考えられる。したがって、この4つの子ども観それぞれとその後の育児や教育に関する方針・行動

との関係を見ていくことは、当初の目的に関して沿ったものとなると判断可能である。

(4) 子ども観の4分類と育児・教育方針

次に4類型ごとに、しつけの仕方や育児方針、教育行動に差異がないか、さらには子ども自身の生活や行動に影響していないか就学前（元森 2008、2009、2010）と、小1時点（元森 2011）とで確認した。

まず、就学前の子育て方針の分析（表5）によれば、「知性×調整」は、叱ったり手伝いをさせたりといった伝統的なしつけには熱心で、それに関連した子どもとの関わりもあるが、生活時間やテレビの時間などに注意する意識は薄く、コミュニケーションをとったり子育てで多くのことに配慮したりといった志向は希薄な傾向がある。「知性×積極」は、しつけやお手伝いにもコミュニケーションにも重きを置かず、知育に熱心で、子どもが活発であることを望む傾向がある。生活時間等には気を配っている。「感性×積極」は、いわゆるしつけには熱心でないように見えるが、子育て全般で意識が高く子どもに細かく配慮する傾向がある。また、コミュニケーションを重視しており、子どもの自発性を重視したり情操教育を重視したりする傾向もある。「感性×調整」は、全般的にやや熱心という傾向が見られる。しつけもコミュニケーションも比較的重視し、衛生や健康面を中心に子どもに気を配り、子どもと一緒に何かをする時間も大切にする傾向がある。極端な傾向はないが、お手伝いや習い事もそれなりにさせる傾向がある。

このような傾向は、子ども観研究に引きつけた、「厳格主義」「業績主義」「児童中心主義」「童心主義」という各グループの性格づけを、さらに裏づけるものとなっていた。

表5 子ども観の子育て方針・行動への影響（就学前まとめ）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
しかり方	有無を言わずしかる	有無を言わずしかる	コミュニケーションでわからせる	コミュニケーションでわからせる
育児方針(意識・配慮)	手薄	活発重視	すべてで配慮	衛生・健康重視
教育行動(幼児期)	家事手伝い	お手伝いより知育	コミュニケーション系お手伝いと情操教育	お手伝いも習い事もそこそこさせる
コミュニケーション	食事・風呂などで多い	全体的に少ない(読み聞かせ除く)	全体的に多い	一緒に過ごす
しつけ	熱心	そうでもない	そうでもない	熱心
テレビ	時間や内容にルーズ	時間や内容に厳しいが、コミュニケーションは少ない	時間や内容に厳しい	コミュニケーションをよくする

次に、子ども観グループによって、子どもの行動や発達に差異があるかを分析したところ（表6）、子ども観や育児方針やしつけの仕方に、かなり対応したものであった。「知性×調整」は、テレビや睡眠や遊びに無頓着な保育者の志向を、「知性×積極」は、情動やコミュニケーションを重視しない保育者の志向を反映したような結果が見られる。「感性×積極」は、何事にも配慮する保育者の方針を超えて、コミュニケーションに富み情動豊かな生活を送っている。「感性×調整」は、テレビも適度に見せるが、他

者とのふれあいや社交を重視する傾向を反映している。

表6 子ども観の子どもへの影響（就学前まとめ）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
しつけ	伝統的な項目が特に身につく	しつけが比較的身につけていない	自他の区別が特に身につく※	他者との社交が特に身につけている
テレビ・ゲーム	テレビとゲームの時間が長い	テレビの時間が短い	テレビもゲームも短い	ゲームは幼時にやらないがテレビは適度に見る
睡眠	極端な早寝早起きか不規則→遅寝か不規則	早寝早起き→遅起き傾向	不規則が少なく、やや早寝早起き	遅寝遅起き→適度な時間の就寝起床
基本的な生活習慣	基本的なしつけが特に身につく	全体的に比較的身につけていない傾向	やや身につけていない傾向	(特徴少)
遊び	伝統的な遊び→遊びが少ない傾向、	活発な遊びはするが、情操にいい遊びはしない傾向・テレビは見ない	道具を使わず情操に役立つ自然な遊び→どの遊びもよくやる傾向	ビデオ・テレビ→情操にいい遊びと生き物と触れ合う遊びが多い傾向
遊び場	遊びに多様性がなく無頓着な傾向?	遊び場に多様性がない	多様な場所で遊ぶ	多様な場所で遊ぶ
遊び	友達よりきょうだい	一人遊び	きょうだいより同い年の友達	ひとりやきょうだいより多様な年齢の友達
子の父母へのコミュニケーション	親との会話が少ないケースが少ないが、一緒に遊んだり触れ合ったり疑問を質問したりは控えめ	コミュニケーションが全体的に少ない傾向	疑問を質問したり親との身体的なふれあいを望む	親に話したり一緒に遊んだりするが、友達のものはねだらない
情動面や社会性の発達	ねばり強さが足りない傾向	感情コントロールと他者との交流が少ない傾向	根気強さが特にある傾向※	情動と他者との協調が特にできる傾向

※印は、子ども観や育児方針と一致しない傾向。

同様に、対象児が小1時点となる第7回において、教育方針について分析した(表7)。「知性×調整」は、先生とコミュニケーションをとり学習習慣を形成するような口出しはするが、学校行事には不熱心で子育てにかかる費用も低め、習い事も低調であるなど、しつけを超えた教育にはさほど熱心ではなく、「学校におまかせ」という態度が他の類型より強かった。「知性×積極」も、先生とコミュニケーションをとり学習習慣を形成するような口出しはするが、学校行事には不熱心という傾向が見られる。しかし、子育て費用は高めで、習い事も熱心であり、勉強系の習い事の比率も高い。教育熱心でとりわけ学力と体力に重点的にお金をかけているが、親自身が関わるという姿勢は弱めである。「感性×積極」は、先生とのコミュニケーションには消極的、学習習慣を形成するような口出しもしないが、学校行事には参加し、子育て費用は高めである。習い事も幅広く行っている。勉強は子どもにゆだねるが、親は別の形で学校に参加し、学習に限らない多面的な教育に熱心と言える。「感性×調整」も、先生とのコミュニケーションには消極的で、学習習慣を形成するような口出しもしないが、学校行事には参加するという傾向が見られるが、子育て費用も低めで習い事もさほど熱心ではない。ただ、勉強の際に母親がコミュニケーションをとるよう心がけている点に特徴がある。

総じて、子どもが2歳半の時点で抱いていた子ども観は、子どもが就学してからも親の教育行動の差異と結びついている。親が金銭や自らの時間をどのように子どもに割くか、体力、学力、情操、しつけなど複数の美德のどの面に力を入れるかは、子ども観と結びついている。

表7 子ども観と親の教育方針（小1）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
学校への関わり	先生とコミュニケーション密 学校行事には不熱心		先生とコミュニケーション薄 学校行事には熱心	
家庭学習への関わり	母：口頭での指示や 時間厳守に熱心		母：口頭での指示や 時間厳守に熱心で はない	母：口頭での指示や 時間厳守に熱心
	父：口頭での指示や時間厳守に熱心			母：コミュニケーション密
子育て費用	低め	高め		低め
習い事	かなり低調	かなり熱心(体を使う もの、勉強系、日数 も多い)	熱心(体を使うもの、 情操など幅広い)	低調

最後に、第7回で、子ども観グループによって、子どもの行動や発達に差異があるかを分析したところ（表8）、子ども観の帰結とは考えられるものの、やや注視が必要な傾向が見て取れた。「知性×調整」は、食事のとり方が健康的ではなく、遊びや放課後の過ごし方も多様性がない。勉強は適度に行っているが読書量は少なく、テレビやゲームの時間が長い。しつけ面で厳格である一方、細かい部分は放任なのかもしれない。「知性×積極」は、ひとりで過ごす時間が多く、友だちと会うのを楽しみにしていない。また、テレビやゲームの時間、読書量は少ないが、勉強時間が長い傾向があり（一方で短い場合もあるが）、遅寝遅起きで、食事も不健康であるなど、生活状況に不安が残る。「感性×積極」は、勉強時間は短いが読書時間が多く、テレビやゲームもあまりしない。睡眠リズムも保たれ、遊びでも食事でも人に囲まれて過ごしているなど、比較的健康的な生活を送っているといえる。「感性×調整」は、より牧歌的で健康的と言える。マンガは読まないがテレビやゲームは適度に楽しみ、遊びも比較的多样である。食事も健康な形でとっている。

表9 子ども観と子どもの生活・学習（小1）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
学校生活の様子	給食を楽しみにしている	友だちと会うのを楽しみにしていない		
学校外の学習時間	適度な時間	短時間か長時間か	かなり短時間	短時間
読書量	かなり少なめ	少なめ	かなり多め	やや多め・雑誌・マンガを読まない
遊び(相手、場所)	友だちよりきょうだいと遊ぶ	ひとりで遊ぶ	子ども同士と大人(家族)と遊ぶ・大人数で遊ぶ	年下やきょうだい、大人(家族)と遊ぶ
	遊び場に多様性がない		多様な場所で遊ぶ・自然な場所で遊ぶ	多様な場所で遊ぶ
放課後の過ごし方(誰と、場所)	ひとりで過ごすことがやや多い	ひとりで遊ぶで過ごすことが多い	友だちと過ごすことが多い	友だち・同居家族と過ごすことが多い
睡眠		遅寝遅起き・不規則	休みの日も遅寝遅起きしない	
食事(孤食、食べないなど)	不健康	やや不健康	健康	比較的健康的
テレビ・ゲーム	長め	短め		適度

全体としては、子どもが2歳半のときに親が抱いていた子ども観は、それが就学後の教育方針にも影響し、さらには子どもの生活や学習にも影響している。なお、「出生児縦断調査」の対象児は、2001年生まれである。2002年度よりいわゆる「ゆとり教育」と呼ばれる学習指導要領が施行されたが、それと前後して「ゆとり批判」が巻き起こっ

た。したがって、2001年生まれの子どもたちが育ってきたのは、ゆとりから学力重視へと論調が変わった中である。そして、2011年度よりいわゆる「脱ゆとり」の新学習指導要領が施行されるが、対象児が小学1年生の時点ですでに「移行措置」として学習内容を多くする指導がなされている。この年齢層で、「知性×積極」、すなわち、情操面を含まない勉強と体力面での業績志向の親を持つ子どもの生活が最も問題があるように見えることは、非常に気にかかる。

Ⅲ 小4時点の家族の子ども観

さて、対象児が小4となる第10回調査では、再び子ども観が尋ねられている。すなわち、2歳半の時点の子ども観からの保育者側の子ども観の変化が見てとれるのである。本節では、第10回調査の子ども観および第3回からの変化の概要、そして、子ども観の規定要因を検討する。

(1) 子ども観の変化

第10回問22では、第3回問14と全く同じ「平成13年生まれのお子さんほどのような子に育てて欲しいと思いますか。次のうち、特に重視したいもの5つまでを選んでその番号に○をつけてください」という設問がある。その回答傾向は、図1に掲載した通りであるが、第10回の選択者が多かった順に並べ替えたのが図4である。「思いやりのある子ども」(84.2%)の選択率が非常に高いのは変わらないが、2位の「じょうぶなからだの子ども」は57.1%と20%以上回答が減っている。さらに、「よく考えて行動する子ども」が44.3%と20%以上回答を増やして3位である。そのほか、「礼儀正しい子ども」「ねばり強い子ども」「人の話をよく聞く子ども」など、知性志向を示すような選択肢の選択率が5%以上上がっており、逆に「正直な子ども」「物を大切にしている子ども」「感性豊かな子ども」「好奇心旺盛な子ども」「自然が好きな子ども」など、調整志向や感性志向を示すような選択肢の選択率が5%以上下がっているなど、感性よりも知性、さらには調整力よりも積極性という傾向が見て取れる。

さらに、よりはっきりと子ども観の変化を見るために、第3回のコレスポンデンス分析の式に第10回の回答を当てはめ、第3回で析出された2軸に沿って第10回の回答者を子ども観の4分類に振り分けてみた結果を示したのが表9である³。「知性×積極」が大きく数を伸ばしているのに対し、「感性×積極」が数を減らしていることがわかる。

³ 第10回の結果で新たにコレスポンデンス分析を行ってみたところ、ほぼ同一の2軸に分類できた。しかし、パネル調査の利点を生かして変化を分析するために、新たな軸を分析に使用するのではなく、第3回で析出された軸を元に分析を継続することとした。

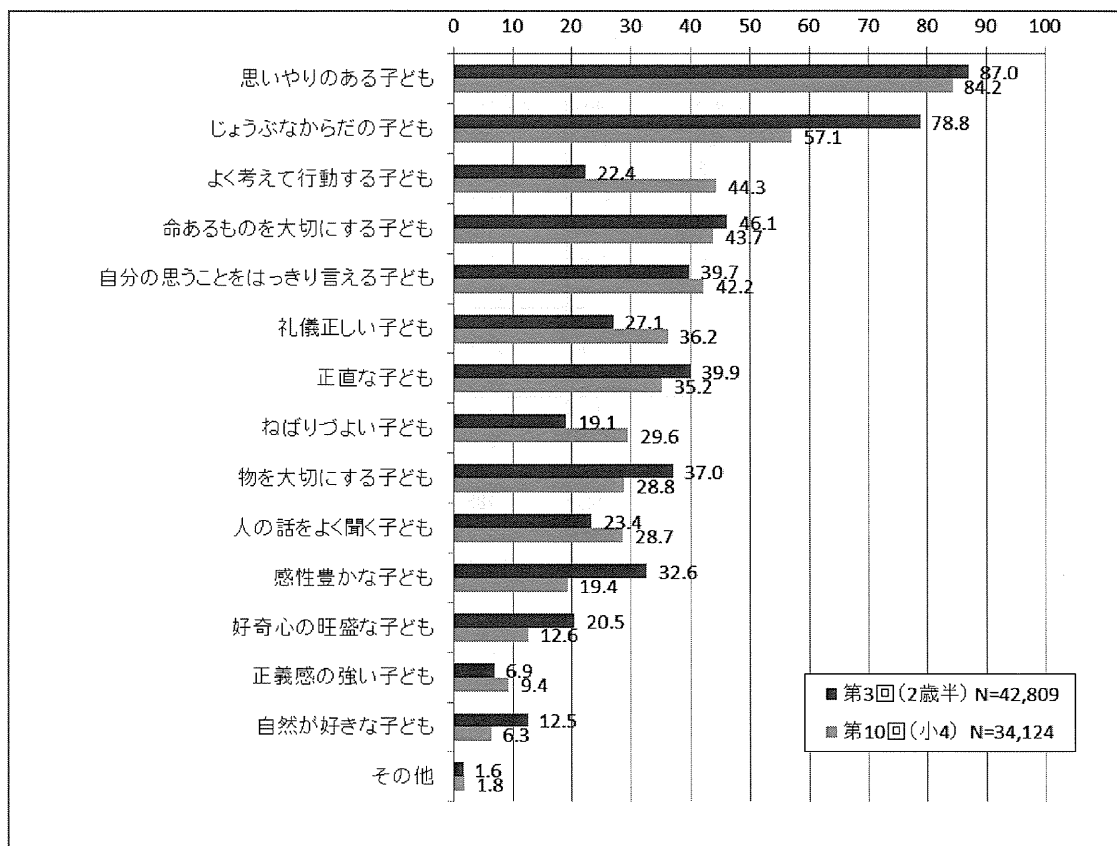


図4 第3回・第10回「どのような子どもに育ててほしいか」の単純集計（多重回答）

表9 第3回と第10回の子ども親の回答傾向の変化

	第3回		第10回	
	度数	パーセント	度数	パーセント
知性×調整	11377	26.6%	8435	24.7
知性×積極	9681	22.6%	10647	31.2
感性×積極	10789	25.2%	7100	20.8
感性×調整	10962	25.6%	7942	23.3
合計	42809	100.0%	34124	100.0

第3回と第10回の子ども親の関係を図示したのが、表10および図5である⁴。全体として、「感性×積極」から「感性×調整」「知性×調整」へ、さらには「知性×積極」へという趨勢が見られる。

⁴ 第3回に回答しているケースのみを対象としているので、第10回の回答者合計が表9と異なっている。

表 10 第 3 回と第 10 回の子ども観の回答傾向の変化 (4 分類)

	第10回				第10回計	脱落	合計	
	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整				
第3回	知性×調整	3119	2607	1104	2046	8333	2501	11377
		37.4%	31.3%	13.2%	24.6%	100.0%		
	知性×積極	27.4%	22.9%	9.7%	18.0%		22.0%	100.0%
		1646	3339	1576	1034	7595	2086	9681
	感性×積極	21.7%	44.0%	20.8%	13.6%	100.0%		
		17.0%	34.5%	16.3%	10.7%		21.5%	100.0%
	感性×調整	1440	2691	2721	1732	8584	2102	10789
		16.8%	31.3%	31.7%	20.2%	100.0%		
	合計	13.3%	24.9%	25.2%	16.1%		19.5%	100.0%
		2128	1890	1627	3039	7595	2086	9681
	合計	28.0%	24.9%	21.4%	40.0%	100.0%		
		22.0%	19.5%	16.8%	31.4%		21.5%	100.0%
合計	8333	10527	7028	7851	33739	8775	42809	
	24.7%	31.2%	20.8%	23.3%	100.0%			
						20.5%	100.0%	

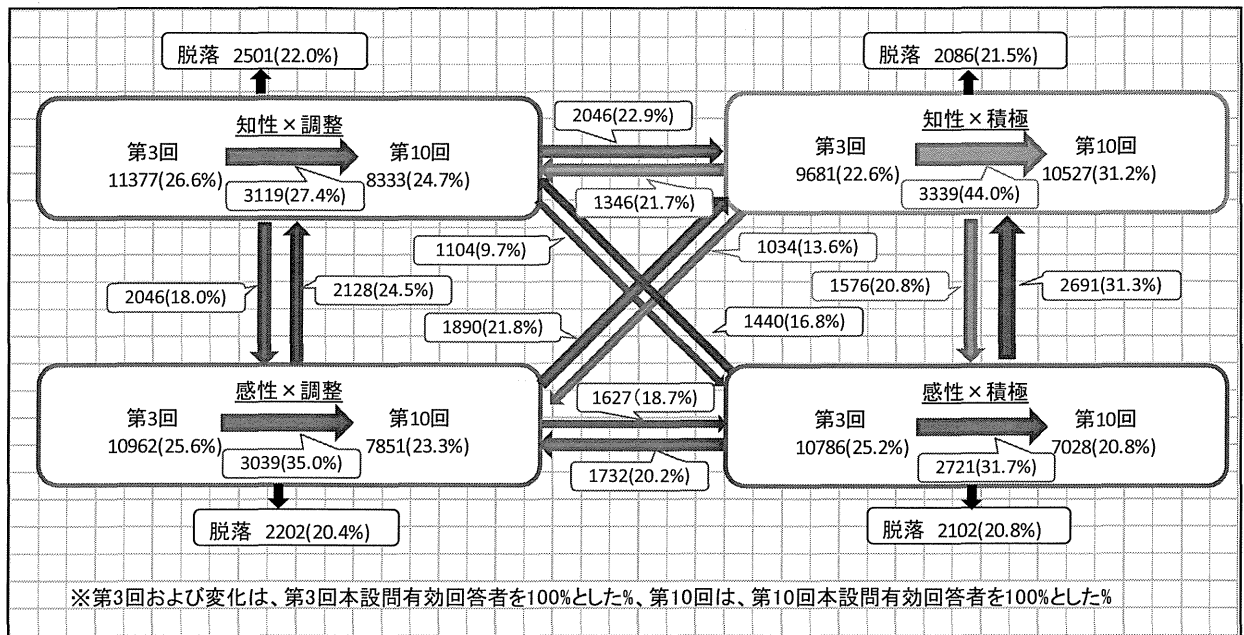


図 5 第 3 回と第 10 回の子ども観の回答傾向の変化 (移動経路)

さらに細かく見ていくと、第 3 回に「知性×調整」だったグループは、そのままが 27.4%と多数派であり、「知性×積極」に変化したのが 22.9%と、知性志向継続が約半数である。「感性×調整」に変化したのが 18.0%、正反対にあたる「感性×積極」への変化は少なく、9.7%である。第 3 回に「知性×積極」だったグループは、そのままが 34.5%と多数派で、「知性×調整」に変化したのが 17.0%と、やはり知性志向継続が半数以上。「感性×積極」に変化したのは 16.3%、正反対の「感性×調整」へと変化したのは 10.7%と少数である。すなわち、第 3 回に「知性」志向だったグループは、第 10 回になっても「知性」側に留まる傾向が強く、正反対のグループへと移行するケースは少数であると言える。

第3回に「感性×積極」だったグループは、そのままが25.2%と他の3グループより同じグループに留まった回答者が少なく、「知性×積極」へ変化が24.9%と拮抗している。「感性×調整」へと変化したのが16.1%、正反対の「知性×調整」へと変化したのが13.3%である。第3回に「感性×調整」だったグループは、そのままが31.4%、「知性×調整」へと変化したのが22.0%。さらに興味深いことに、正反対の「知性×積極」へと変化したのが19.5%と、「感性×積極」へ変化した16.8%を抜いている。「感性」グループでは、子ども観が変化する場合は、「感性」志向に留まるのではなく、「積極」か「調整」という志向を残したまま「知性」志向へと変化していく傾向が見られるのである。

全体としては、まず知性志向への移行、中でも「知性×積極」志向への移行の傾向が見られ、「感性×積極」へと新たに移行していく層は少ないことがわかる。

(2) 子ども観の規定要因

この第10回の子ども観のグループの規定要因を分析するため、各グループか否かを従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。独立変数は以下である。

- ・ 子どもの性別：女子ダミー（男子を基準）
- ・ 第10回の回答者：回答者父のみダミー 回答者父母のみダミー 回答者その他ダミー（回答者母のみを基準）
- ・ きょうだい数
- ・ 第10回時点で祖父母と同居しているか否か：祖父母同居ダミー（非同居を基準）
- ・ 第10回時点の居住地の都市規模：13都市ダミー 郡部ダミー 外国ダミー（その他の都市を基準変数としたその他の都市を基準）
- ・ 第10回時点の母親の就業状況：母主婦ダミー 母常勤ダミー（母親の職業が無職、学生、パート・アルバイト、自営業・家業、内職、その他、不詳の場合をまとめて「それ以外」とし、基準変数とした）
- ・ 父親の職業（第3回調査時のデータ）：父専門・技術職ダミー 父管理職ダミー 父販売職ダミー 父サービス職ダミー 父保安職ダミー 父農林漁業職ダミー 父運輸・通信職ダミー 父生産工程・労務職ダミー 父職その他ダミー（事務職を基準）
- ・ 第10回時点の父母の年収：母親の就労収入と父親の就労収入とその他の世帯年間収入との総計
- ・ 父親の学歴（第2回調査）：父大卒以上ダミー 父学歴その他ダミー（大卒未満を基準）（注）父母の学歴は相関が高いため、父の場合のみを参考とした。
- ・ 第10回時点の父母の年齢

その結果を示したのが、表11である。また、表11'では、有意な係数の符号のみを書き出し、分析に用いた変数が同一ではないので、厳密な比較はできないものの、第3回の子ども観の規定要因分析（元森2007）と比較した。

表 11 第 10 回の子ども観の規定要因 (ロジスティック回帰分析)

N=33,563														
	知性×調整			知性×積極			感性×積極			感性×調整				
	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)		
女子ダミー	.098	.000 ***	1.103	-.173	.000 ***	.841	-.041	.132	.960	.143	.000 ***	1.154		
回答者父のみダミー	-.093	.065	+	.912	.005	.915	1.005	-.003	.959	.997	.086	.080	+	1.089
回答者父母のみダミー	.301	.033 *	1.351	-.128	.373	.880	-.340	.056	+	.712	.095	.526		1.100
回答者その他ダミー	.301	.063	+	1.352	.148	.357	1.160	-.240	.273	.787	-.417	.037	*	.659
きょうだい数	.075	.000 ***	1.078	-.041	.008 *	.960	-.067	.000 ***	.935	.032	.053	+	1.033	
祖父母同居ダミー	.051	.095	+	1.053	.018	.536	1.018	-.115	.001 **	.891	.027	.401		1.027
大都市ダミー	-.021	.492	.979	.022	.438	1.022	.023	.459	1.024	-.028	.360			.972
郡部ダミー	.009	.836	1.009	.020	.632	1.020	-.050	.316	.952	.009	.841			1.009
外国ダミー	-.446	.092	+	.640	-.110	.599	.896	.342	.100	1.408	.131	.556		1.140
母主婦ダミー	-.013	.671	.987	-.030	.289	.970	.026	.422	1.026	.025	.416			1.026
母常勤ダミー	-.033	.328	.967	-.002	.943	.998	.082	.023 *	1.086	-.039	.263			.962
父職その他ダミー	.116	.059	+	1.123	-.025	.658	.975	-.085	.208	.918	-.023	.714		.977
父専門・技術職ダミー	.006	.900	1.006	.001	.976	1.001	.101	.025	*	1.106	-.110	.014	*	.895
父管理職ダミー	-.105	.096	+	.901	-.041	.458	.960	.120	.049	*	1.127	.022	.715	1.023
父販売職ダミー	.052	.313	1.053	-.096	.040 *	.908	.002	.963	1.002	.060	.241			1.062
父サービス職ダミー	-.030	.642	.970	.013	.828	1.013	-.054	.441	.948	.056	.386			1.057
父保安職ダミー	.177	.039 *	1.194	-.046	.576	.955	-.107	.273	.898	-.045	.619			.956
父農林漁業職ダミー	.110	.320	1.117	-.106	.324	.899	.283	.016 *	1.327	-.271	.027	*	.762	
父運輸・通信職ダミー	.110	.103	1.117	-.096	.139	.909	-.079	.301	.924	.051	.457			1.053
父生産工程・労務職ダミー	.051	.302	1.052	-.046	.315	.955	-.065	.221	.937	.048	.337			1.049
父大卒以上ダミー	-.206	.000 ***	.814	.129	.000 ***	1.138	.240	.000 ***	1.271	-.173	.000 ***	.841		
父学歴その他ダミー	-.143	.097	+	.867	.120	.129	1.127	.145	.115	1.156	-.121	.172		.886
父年齢	.000	.927	1.000	.007	.032	1.007	-.002	.658	.998	-.006	.071	+	.994	
母年齢	-.022	.000 ***	.978	-.003	.377	.997	.029	.000 ***	1.029	.000	.925			1.000
定数	-.297	.029 *	.743	-.826	.000 ***	.438	-2.468	.000 ***	.085	-.981	.000 ***	.375		
		0.007			0.003			0.010			0.004			

表 11' 第 10 回の子ども観の規定要因 (ロジスティック回帰分析の係数の符号)

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
女子ダミー	+	-		+
回答者父のみダミー	-			+
回答者父母のみダミー	+		-	
回答者その他ダミー	+			-
きょうだい数	+	-	-	+
祖父母同居ダミー	+		-	
大都市ダミー				
郡部ダミー				
外国ダミー	-			
母主婦ダミー				
母常勤ダミー			+	
父職その他ダミー	+			
父専門・技術職ダミー			+	-
父管理職ダミー	-		+	
父販売職ダミー		-		
父サービス職ダミー				
父保安職ダミー	+			
父農林漁業職ダミー			+	-
父運輸・通信職ダミー				
父生産工程・労務職ダミー				
父大卒以上ダミー	-	+	+	-
父学歴その他ダミー	-			
父年齢			+	-
母年齢	-		+	
定数	-	-	-	-

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
女子ダミー	+	-	-	+
回答者父のみダミー	-	+	+	-
回答者父母のみダミー				
回答者その他ダミー	+	+	-	-
きょうだいダミー	+	+	-	-
祖父母同居ダミー	+		-	
13都市ダミー				
郡部ダミー				
外国ダミー				
母主婦ダミー		-		+
母常勤ダミー	-	+		-
父専門・技術職ダミー			+	-
父管理職ダミー				
父販売職ダミー	+	-		
父サービス職ダミー	+	-		
父保安職ダミー	+			
父農林漁業職ダミー				
父運輸・通信職ダミー	+			
父生産工程・労務職ダミー	+		+	
父職その他ダミー				
父大卒以上ダミー	-	+	+	-
父学歴その他ダミー		+		
父母平均年齢(第3回)		+		-

※右側は、第 3 回の分析結果 (元森 2007)

「知性×積極」は、女兒＋、回答者父－、回答者父母＋、回答者その他＋、きょうだい数＋、祖父母同居＋、外国－、父職その他＋、父管理職－、父保安職＋、父大卒以上－、母年齢－、という傾向が見られる。女兒で、きょうだいが多く、祖父母との同居率が高い、父親が職業威信の低い職業で学歴が高くないなど、第3回の傾向が継続していると言える。

「知性×積極」は、女兒－（＝男児＋）、きょうだい数－、父販売職－、父大卒以上＋と、第3回の傾向のいくつかが継続している。このグループは、各グループから移行したケースが多いため、第3回時点の傾向が弱まっていると見られる。

「感性×積極」は、回答者父母のみ－、きょうだい数－、祖父母同居－、母常勤＋、父専門・技術職＋、父管理職＋、父農林漁業職＋、父大卒以上＋、母年齢＋、と言う傾向が見られる。きょうだいが少なく、祖父母と同居していない、父の職業威信や学歴が高いといった点は継続している。母の常勤が多いのも、復職した可能性もあり、全体としては第3回の傾向が継続していると判断できよう。

「感性×調整」は、女兒＋、回答者父＋、回答者その他－、きょうだい数＋、父専門・技術職－、父農林漁業職－、父大卒以上－、父年齢－、という傾向が見られる。回答者が父だったケースが多いのと、きょうだいが多いというのは、第3回の傾向と相反するが、父に専門職が少なく、大卒以上が少ないなどの傾向は同じである。

さらに、別途、父母の読書量を見てみると（表12）、「調整」型は2グループとも、父母とも読書量が少なく、「積極」型は読書量が多いことがわかった。とりわけ、「知性×積極」型は多い。

表12 第10回の子ども親と父母の読書量（小説、絵本）

①お母さん								
	読まない	1冊	2, 3冊	4～7冊	8冊～11冊	12冊以上	無回答	合計
知性×調整	4052 48.0%	2031 24.1%	1272 15.1%	389 4.6%	101 1.2%	131 1.6%	459 5.4%	8435 100.0%
知性×積極	4450 41.8%	2679 25.2%	1847 17.3%	702 6.6%	162 1.5%	223 2.1%	584 5.5%	10647 100.0%
感性×積極	2618 36.9%	1927 27.1%	1426 20.1%	492 6.9%	138 1.9%	171 2.4%	328 4.6%	7100 100.0%
感性×調整	3696 46.5%	2027 25.5%	1236 15.6%	344 4.3%	92 1.2%	124 1.6%	423 5.3%	7942 100.0%
合計	14816 43.4%	8664 25.4%	5781 16.9%	1927 5.6%	493 1.4%	649 1.9%	1794 5.3%	34124 100.0%
②お父さん								
	読まない	1冊	2, 3冊	4～7冊	8冊～11冊	12冊以上	無回答	合計
知性×調整	4041 47.9%	1332 15.8%	1142 13.5%	450 5.3%	117 1.4%	153 1.8%	1200 14.2%	8435 100.0%
知性×積極	4669 43.9%	1804 16.9%	1600 15.0%	654 6.1%	195 1.8%	225 2.1%	1500 14.1%	10647 100.0%
感性×積極	3015 42.5%	1179 16.6%	1200 16.9%	503 7.1%	138 1.9%	159 2.2%	906 12.8%	7100 100.0%
感性×調整	3726 46.9%	1277 16.1%	1119 14.1%	400 5.0%	93 1.2%	128 1.6%	1199 15.1%	7942 100.0%
合計	15451 45.3%	5592 16.4%	5061 14.8%	2007 5.9%	543 1.6%	665 1.9%	4805 14.1%	34124 100.0%

※クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした

以上より、全体傾向としては、各層の特徴は残っていると言える。ただ、「知性×積極」ではグループに分類されるケースが増えたために傾向が曖昧となっており、「感性×調整」では変化した部分もある。変化の流れとあわせて考えると、やはり対象児の年齢が上がる中で、知性と積極性を期待する全体的な流れができていと言えよう。とはいえ、大卒では、伝統的な「知性×調整」、高学歴層層の「知性×積極」、現代的で進歩的な「感性×積極」、のんびりした「童心主義」といった傾向は維持されている。

(3) 子ども観と子どもの性格

次に、子ども自身の性格との関係も検討してみたい。第9回問15で「平成13年1/7月生まれのお子さんは現在どのような性格だと思いますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください」という第4回問11と同様の設問がある。先述の第3回の子ども観と第4回の子どもの性格を用いた分析では、時系列的に影響関係が曖昧であったが、今回は、第10回の子ども観の前に第9回の子どもの性格の設問があり、子どもの性格に関する認識が、子ども観にどう影響しているかを見ることができよう。

第10回の子ども観の各グループか否かを従属変数し、第9回の子どもの性格の選択肢の選択有無を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った結果が表12である。表12は有意だった係数の符号のみを描き出したものである。同一の分析を行った第3回の子ども観の規定要因分析(元森2007)を比較のために掲載した。

「知性×調整」は、だれにでも愛想がよい、気が短い、我が強い、落ち着きがないが+、人見知りが多い、気が弱い、素直、好奇心が旺盛、甘えん坊、その他が-であり、「知性×積極」は、おとなしい、気が弱い、執着心が高い、せっかちが+、活発、誰にでも愛想がよい、勝気・負けず嫌い、素直、恥ずかしがり屋、甘えん坊、その他、わからないが-。「感性×積極」は、何事にも慎重、何事にもマイペース、素直、好奇心が旺盛、甘えん坊、その他、わからないが+、気が短い、我が強い、落ち着きがない、のんびり屋、せっかちが-。「感性×調整」は、活発、甘えん坊が+、気が短い、1人でやりたがる、好奇心が旺盛、落ち着きがないが-となっている。

この結果は、第3回と第4回を用いた分析とはほとんど一貫性がない。ただ、それぞれのグループの説明としては筋が通っている。子ども観は、「知性か感性か」のレベルでは子どもの性格を一部反映している一方、「調整か積極か」という点では子どもの性格を反映している面もあるものの、どちらかといえば「ないものねだり」の側面があると言えそうである。

表 13 第 10 回の子ども観と子どもの性格（ロジスティック回帰分析）

N=33,182																
	知性×調整			知性×積極			感性×積極			感性×調整						
	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)				
おとなしい	-.025	.561	.976	.064	.090	+	1.066	.001	.977	1.001	-.057	.184	.945			
活発	.036	.222	1.037	-.123	.000	***	.884	.004	.889	1.004	.105	.001	**	1.110		
誰にでも愛想がよい	.081	.008	**	1.085	-.056	.051	+	.945	-.052	.109	.949	.030	.329	1.031		
人見知りが激しい	-.141	.009	**	.869	.069	.152		1.071	.067	.231	1.069	-.002	.966	.998		
お調子者	-.028	.362		.973	.024	.391		1.025	-.022	.501	.978	.021	.505	1.021		
気が短い	.077	.036	*	1.080	.046	.183		1.047	-.088	.035	*	.916	-.066	.091	+	.936
何事にも慎重	-.044	.189		.957	.003	.917		1.003	.096	.005	*	1.101	-.051	.132	.950	
何事にもマイペース	-.046	.112		.955	.019	.470		1.019	.062	.041	*	1.064	-.032	.278	.969	
我（気）が強い	.101	.001	**	1.107	-.046	.127		.955	-.062	.073	+	.940	.003	.924	1.003	
気が弱い	-.080	.055	+	.923	.097	.010	**	1.102	.025	.565		1.025	-.060	.151	.941	
勝ち気、負けず嫌い	.029	.336		1.030	-.004	.878		.996	.010	.753		1.010	-.033	.282	.967	
素直	-.138	.000	***	.871	-.084	.001	**	.919	.219	.000	***	1.245	.037	.184	1.038	
1人でやりたがる	.050	.170		1.052	.036	.293		1.037	-.031	.432		.970	-.068	.075	+	.935
執着心が強い	-.065	.108		.937	.092	.013	*	1.096	-.009	.833		.991	-.036	.390	.965	
好奇心が旺盛	-.156	.000	***	.855	-.014	.616		.986	.270	.000	***	1.310	-.074	.013	*	.929
飽きっぽい	.008	.800		1.008	-.018	.560		.983	-.018	.604		.982	.028	.400	1.028	
落ち着きがない	.202	.000	***	1.224	.033	.286		1.034	-.196	.000	***	.822	-.084	.015	*	.919
恥ずかしがり屋	.046	.120		1.047	-.065	.019	*	.937	-.015	.644		.986	.044	.141	1.045	
甘えん坊	-.060	.022	*	.942	-.090	.000	***	.914	.070	.013	*	1.072	.106	.000	***	1.112
のんびり屋	-.010	.763		.990	.024	.438		1.025	-.067	.060	+	.935	.043	.211	1.044	
せっかち	-.012	.806		.988	.107	.017	*	1.113	-.112	.039	*	.894	-.020	.697	.980	
その他	-.146	.025	*	.864	.024	.677		1.024	.187	.003	**	1.206	-.067	.304	.936	
わからない	-.731	.339		.481	-.611	.348		.543	1.217	.025	*	3.376	-.067	.918	.935	
定数	-1.060	.000	***	.346	-.688	.000	***	.503	-1.504	0.000	.222	-1.232	.000	***	.292	
R2	0.005			0.003			0.008			0.002						

表 13' 第 10 回の子ども観と子どもの性格（ロジスティック回帰分析の符号の係数）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
おとなしい		+		-
活発		-		+
誰にでも愛想がよい	+	-		
人見知りが激しい	-			
お調子者			+	
気が短い	+		-	-
何事にも慎重			+	
何事にもマイペース			+	
我（気）が強い	+		-	
気が弱い	-	+		
勝ち気、負けず嫌い		-		
素直	-	-	+	
1人でやりたがる				-
執着心が強い		+		
好奇心が旺盛	-		+	-
飽きっぽい			-	+
落ち着きがない	+		-	-
恥ずかしがり屋		-		
甘えん坊	-	-		+
のんびり屋			-	
せっかち		+	-	
その他	-	-	+	
わからない		-	+	
定数	-	-		-

※右側は第 3 回と第 4 回を用いた分析結果（元森 2007）

IV 子ども観と教育方針・子どもの生活

以上の子ども観の大枠を確認したうえで、本節では、子ども観によって保育者の教育方針・教育行動が異なるかを確認し、次いで子どもの学習行動や生活に影響しているかを確認する。分析は主としてクロス表分析を行った。各セルの残差に注目し、全体傾向との差異があるとみなせる残差 ± 1.97 を目安とし、残差の絶対値 1.97 を超えるセルに注目し、全体傾向からの各グループの偏差に注目して分析を行う。

(1) 教育方針・教育行動

保育者の教育方針・教育行動については、第 10 回の調査における、「お母さんやお母さんの家庭学習（宿題を含む）への関わり方」（問 7）と、「習い事等（スポーツクラブ、学習塾等を含む）をしていますか」（問 11）という質問を元に、父母の家庭学習へのかかわり方と、習い事や学習塾等にどの程度力を入れているかを見ることで考えたい。

①父母の家庭学習へのかかわり

「知性×調整」は父母とも「勉強するようによく言っている」「勉強する時間を決めて守らせている」が「よくある」傾向が強く、母が「勉強を見ている」、父が「勉強をした確認している」が「よくある」傾向が見られるなど、口頭での支持や時間厳守など、勉強について形式的な面からしっかりしつける傾向が見られる。「知性×積極」は、同様に父母とも「勉強するようによく言っている」「勉強する時間を決めて守らせている」が「よくある」傾向が強い。

反対に、「感性×積極」は、父母とも「勉強するようによく言っている」「勉強する時間を決めて守らせている」で「ほとんどない・まったくない」傾向が強く、母が「勉強を見ている」、父が「勉強をした確認している」が「ほとんどない・まったくない」傾向が見られるなど、勉強についてしつけを行わない傾向があるようである。「感性×調整」は、「勉強するようによく言っている」「勉強する時間を決めて守らせている」とも、母親で「ときどきある」が多く、「勉強を見ている」「勉強をした確認している」で、父親で「ときどきある」が多いなど、中庸の指導をしている。

形式的な面から勉強指導に熱心な「知性」層とそうでない「感性」層と言えそうである。